

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

平成25年3月15日

農林水産省

青森県

<品種別作付面積割合の動向>

主な品種名	県計・作柄表示地帯	(参考)10a当たり収量水準(kg)			年次別作付面積割合(%)						
		平均値	H20	H24	H20	21	22	23	24	25(見込)	
つがるロマン	青森地帯	591	608	580	5.9	5.5	5.2	5.1	4.9	4.7	
	津軽地帯	615	633	625	43.9	41.5	38.4	32.6	30.7	28.1	
	南部・下北地帯	548	576	568	5.6	6.5	6.0	5.9	5.6	5.4	
	県計	603	626	614	55.4	53.5	49.7	43.6	41.2	38.2	
まっしぐら	青森地帯	559	557	628	4.5	4.8	4.9	5.2	5.6	5.9	
	津軽地帯	634	661	667	11.2	14.6	18.0	24.1	26.8	29.7	
	南部・下北地帯	559	563	572	23.1	22.2	22.8	22.5	22.4	22.8	
	県計	585	594	628	38.8	41.6	45.7	51.8	54.8	58.4	
単収試算値の対前年差(kg)									1.3	0.7	0.5

※ 1. 10a当たり収量水準の平均値は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である(以下同じ。)
2. 平成25年産見込は種子の予約数量から推計した。

1 品種構成の動向

「まっしぐら」及び「つがるロマン」を中心とする品種構成であるが、近年、「まっしぐら」が増加する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

良質・良食味米の安定生産に向け、健苗育成と適期移植、適正な水管理、土作りの推進と適正な施肥等の指導が行われている。

なお、微増ではあるが収量水準の高い津軽地帯の作付割合が増加している。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、登熟期間の平均気温が高めに推移している。

また、収量構成要素をみると、近年、もみ数は年次間で振れがあるものの、千もみ当たり収量は高めとなっている。

<最近の作柄(平成18年産以降)>

年次	全もみ数	登熟	被害	(作況最終指数)
18	—	—	—	100
19	—	×	—	99
20	—	○	○	105
21	—	—	—	101
22	××	◎	—	100
23	×	◎	○	103
24	—	◎	◎	106

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、—: 平年並み
×: やや不良(やや少ない)、××: 不良(少ない)
ただし、被害は、◎: 少ない、○: やや少ない、—: 平年並み
×: やや多い ××: 多い

4 収量水準の動向

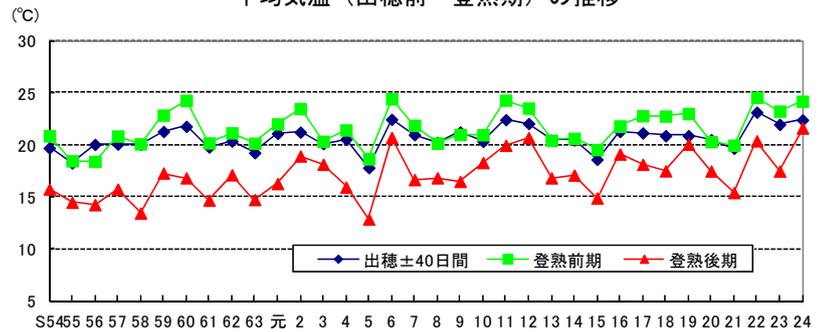
地域別作付面積割合の高い津軽地帯で、「つがるロマン」に比べ収量水準の高い「まっしぐら」の作付けが増加していることに加え、収量水準の高い当該地帯の作付面積割合が増加していることから収量水準は上昇傾向にある。

<地域別作付面積割合の動向>

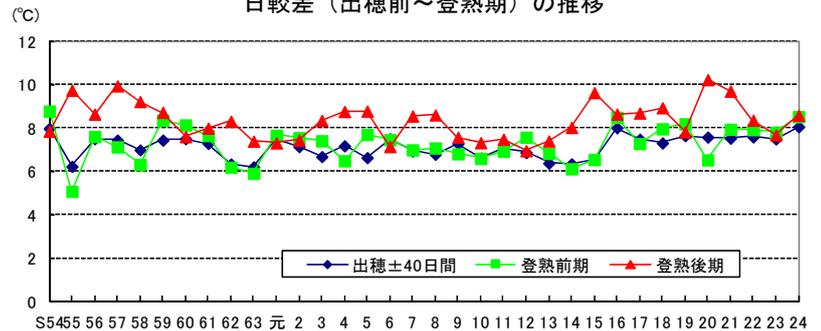
作柄表示地帯	(参考)10a当たり収量水準(kg)	年次別作付面積割合(%)					25(見込)	
		H20	21	22	23	24		
青森地帯	580	11.0	10.9	10.7	10.8	10.9	11.0	
津軽地帯	618	58.6	58.6	58.9	59.3	59.7	60.1	
南部・下北地帯	551	30.5	30.5	30.4	29.9	29.4	28.9	
単収試算値の対前年差(kg)						0.3	0.3	0.3

※ 平成25年産見込は市町村別の需要量に関する情報から推計。

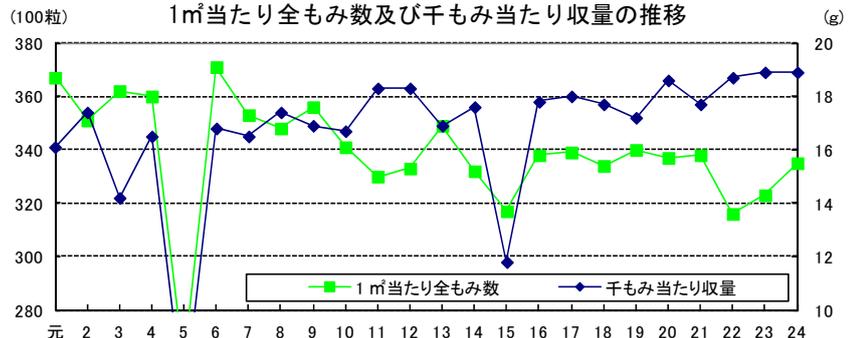
平均気温(出穂前~登熟期)の推移



日較差(出穂前~登熟期)の推移



1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



佐賀県

1 品種構成の動向

「ヒヨクモチ」、「夢しずく」、「ヒノヒカリ」及び「さがびより」を中心とする品種構成となっているが、今後、「ヒヨクモチ」及び「ヒノヒカリ」の作付割合が減少傾向、「夢しずく」及び「さがびより」の作付割合が増加傾向にある。

2 栽培技術等の動向

良食味米生産等推進のため、生育ステージに応じた施肥管理、水管理（適正な中干しの実施、早期落水の防止）等の指導が行われているが、省力化として基肥一発肥料の利用が中晩生品種で増加している。

また、稲後作の準備のため早期落水の傾向がみられる。

3 気象と収量構成要素の推移

近年は、出穂前後40日間の平均気温が上昇傾向となっている。

また、収量構成要素をみると、千もみ当たり収量が減少傾向となっている。

<最近の作柄（平成18年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	（作況最終指数）
18	××	××	××	49
19	—	×	×	95
20	×	—	—	98
21	×	○	—	100
22	××	—	××	94
23	—	—	—	101
24	×	—	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、—：平常並み
 ×：やや不良（やや少ない）、××：不良（少ない）
 ただし、被害は、◎：少ない、○：やや少ない、—：平常並み
 ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

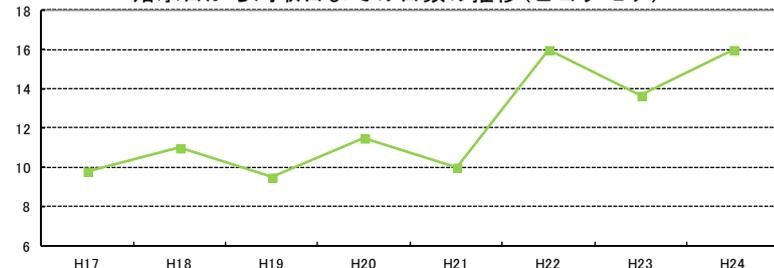
出穂期前後の高温で、省力化のため利用が増えている基肥一発肥料の効果が適切な時期に十分に発揮されないことや、稲後作準備のための早期落水による登熟への影響等により、収量は低下傾向にある。

<品種別作付面積割合の動向>

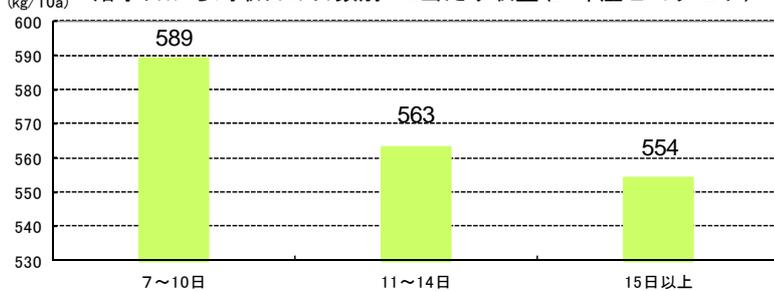
主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H20	21	22	23	24	25 (見込)	
ヒヨクモチ	561	22.7	24.2	24.7	25.0	24.6	23.1	
夢しずく	486	19.5	23.4	22.9	23.0	22.0	23.1	
ヒノヒカリ	501	33.4	20.4	19.8	20.3	20.5	19.7	
さがびより	517		5.6	15.5	16.3	17.1	19.4	
コシヒカリ	434	9.1	8.9	8.2	8.2	8.4	8.4	
単収試算値の対前年差(kg)						-0.2	0.0	-0.8

※ 1. 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低2か年を除く5か年平均である。
 2. 平成25年産見込は県の品種別作付計画から推計した。

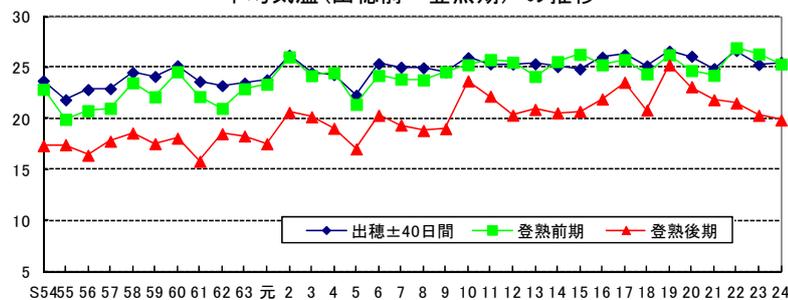
(B) 落水日から刈取日までの日数の推移(ヒヨクモチ)



(kg/10a) 落水日から刈取日の日数別10a当たり収量(24年産ヒヨクモチ)



(°C) 平均気温(出穂前~登熟期)の推移

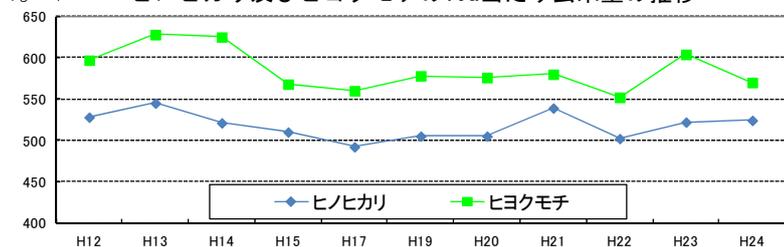


(100粒) 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移 (g)



※ 作況指数100から10ポイント以上差のある年次を除外している。

(kg/10a) ヒノヒカリ及びヒヨクモチの10a当たり玄米重の推移



※ 作況指数100から10ポイント以上差のある年次を除外している。